

<コラム>

4 時間の冷めやらぬ熱 ——第1回人類学バトル観察——

Four Hours of Heated Discussion: Observations of the 1st Anthropological Battle

若松 文貴*

「コーン」というゴングの音を合図にバトル開始。発表者は限られた時間を最大限に使いながら、席を埋めた観客に向かって賛否の主張を訴える。第1回の論題は「人類学は役に立つ人類学を目指すべきか」。ときには真剣な眼差しで語り、ときには揶揄と冗談で笑いを誘いながら、観客を巻き込んでいく。そして討論を終えた発表者4人の火花は、「場外バトル」として観客にも飛び火していく。発言者は、人類学者であろうとなかろうと、次から次へと手を挙げて鋭い意見と質問をぶつけていく。学会の質疑応答でよくある「気まずい静寂」はなく、絶え間なく発言が続いたために、最後の方では議論が混迷するほどだった。あっという間に過ぎ去った4時間のバトルは、参加者全員の投票という形で決着がつけられる。結果は賛成23票、反対43票、白票7で反対派の勝利。勝利票を投じた者には懇親会の参加費が割引されるという特典も付いたせいか、観客の多くが残って参加していた。バトルでの対決が嘘のように、賛成派・反対派の垣根を超えて和やかに談笑していたのが印象的だった。

私の所属するハーバード大学の社会人類学科では、最低でも週に1度は外部の人類学者を招いて講演会が行われる。教授だけでなく院生にも参加が義務付けられている。たしかに第一線で活躍する学者の最新の研究を知ることができる点ではとても貴重な場であるが、いささか形式的になっている。講演者は用意した論文をひたすら早口で読み上げ、その内容に対して教授陣と一部の院生のみが質問・コメントを返す。私を含め多くの院生は必死にノートを取り、発表内容を消化するだけで精一杯である。また、講演が終わった後は短いレセプションがあるものの、講演者は教授陣と共に学内の高級レストランへと移動し、院生がインフォーマルな形で講演者と話をする機会はほとんどない。従って、講演会は新しい知識を一方的に与えられる機械的な場になってしまっている。

対照的に、人類学バトルでは問題提起・論駁・提起再論・再論駁という流れで計4人の人類学者が共通の論題について賛否両論を対決させる形になっている。今回のバトルが観客も巻き込んで盛り上がったのは、まず「誰もが気にかけていたものの正面切って論じることの少なかった熱いトピック」を取り上げていたからだ。正式な学会・講演会ではなかなか議論されない重要な問題を敢えて論題に選び、すでに多くの業績を挙げている年輩と中堅の人類学者が論じる場を、このバトルは提供していた。そして何よりも議論の勢いを煽ったのは、参加者全員の投票で勝敗を決めるゲーム形式をとっていたからである。白黒

* ハーバード大学人類学部社会人類学科後期博士課程

をはっきりさせる対決という形をとることで、討論する発表者も審査する観客もより積極的に議論に加わらざるを得ない。真剣勝負で起こる発表者の感情が観客にも移入してきて、さらに深く考える原動力となっていたのが、このバトルの醍醐味だったのではないだろうか。以下では、4人の発表の具体的内容と場外バトルでの意見・質問を取り上げていきたい。

まず問題提起の口火を切った東京大学の山下晋司氏は、イギリス、アメリカ、日本各国において応用人類学の分野が発展してきた歴史的過程を説明した。各国とも戦前・戦中は植民地主義・占領化政策・ナショナリズムなどの時代の要請に応える形で応用人類学が制度化されてきたが、1980年代以降には医療・教育・開発・防災などの学問分野を横断する新たな問題群が現れてきた。しかし、質的調査という人類学の研究手段に他分野からの関心が増大しているものの、人類学内部では未だその対応ができていない点を指摘する。そこで、山下氏は「public or perish（公に應用されなければ廃れる）」という言葉を用い、人類学は「誰にとって」「何のために」役に立つかを自ら証明していく必要があると主張する。応用人類学を純粋人類学と対立するものとして捉える「研究貴族主義」に陥るのではなく、公共領域に役立つ形で人類学の刷新を図るべきだと。

これに対する論駁として放送大学の内堀基光氏は、人類学が外部組織と協調関係を築くことに反対の意志を示す。人類学は役立つしか生き延びる術がないという現実を認めるが、その前提として「外部者による人類学の使われ方」と「人類学者による人類学の使い方」とを区別する必要があると主張する。そこで内堀氏は、この区分を基に人類学の有用性を分類した「人類学的知識の社会的活用マトリックス」を提示した。まず、外部者の要請に応える形で役立てても、有用性を決めるのは外部であり、また、その過程で人類学が隣接分野に吸収されることもあるので、独自の研究対象・方法を再生産するには困難が伴う。むしろ、不可能であっても、人類学者が目指していくべきは「人類の将来はどのようにあるべきか」という問いに答えるような「知識の全体的活用」である。従って、「役に立つべき」という方向に向かうよりは、「独自の学問として人類学はどのようにあるべきか」という問いに立ち返る必要があると結論した。

提起再論を始めた大阪大学の栗本英世氏は、自著が学問的意図とは無関係に現地の人々によって使われた例を紹介し、調査対象者との複雑な関係の中で人類学がいかに役立つべきかを論じた。栗本氏は、調査地のエチオピアで、氏が過去に英語で出版した民族分布図や民族誌が複写され、現地の店頭で販売されたり、大量に配布されたりしていたことを発見する。そこには、紛争に伴って移入してくるマイノリティー民族を「外者」として排除するために、マジョリティー側の民族主義者が自らの支配領域を証明する材料として恣意的に利用している背景がある。このように学問的成果が現地の権力関係に影響を及ぼし、人類学者が権力を持つ者に関わらざるを得ない状況で、人類学者はどう役立つべきなのか。栗本氏は、生存の危機にさらされている人々がより良い生活を実現できるようコミットし

ながらも、人類学者は権力システム・支配的イデオロギーに対しては批判的な立場を取っていく必要があると主張する。

最後に再論駁として発表した筑波大学の内山田康氏は、人類学者がどれだけ意識的に政治的正義の判断基準を築いて役立てようとしても、各時代の政治・経済的文脈に埋没してしまう危険性を指摘する。内山田氏はカトリン・ゴフというイギリス人の女性人類学者の例を引き合いに出す。彼女は 50 年代にアメリカの大学に就職するが、当時のベトナム戦争に関するケネディー政策を糾弾し、農民支持を訴えた演説を行ったことで職を追われた。その後、フリーの人類学者としてカナダで執筆を続け、人類学は再帰性 (reflexivity) という言い訳をしながらも帝国主義に加担していると批判した。ところが、晩年に近い 1990 年には “Imperialism and Anthropology: Revisited” という論文を発表し、アメリカだけを批判的とし、共産主義国の帝国主義を否定しなかったことを自ら反省する。この例から、内山田氏は、フロイトの言葉を引用し、他人の無意識はわかるが自分の無意識は決してわかりえない点を強調する。そして、結論として人類学が役立とうとすることによって「悪が善の姿になってやってくる」危険を生むと結んだ。

以上の「場内バトル」の展開は、「場外バトル」において、観客からの賛否両論の意見を次から次へと引き起こした。特に、国際協力や開発援助などの仕事に実際に携わっている専門家が人類学の有用性に対して意見を述べたのが興味深かった。その中には、人類学の手法・知識に期待を寄せているもの人類学者自身がどのような関心を持っているのかわからない、という疑問や、人類学者は役に立っていることに関しては意識的だが役に立っていないことには無意識なのではないか、という厳しい批判もあった。また、他の社会科学分野の学者からは、「グローバル化」や「文明の衝突」というマクロな分析概念が政治・経済の分野で濫用されているが、そのような分野に対して人類学は自らのミクロな視点をどのように関与させることができるのか、という問いも出た。もちろん人類学者からの意見も相次いで出たのだが、今回の論題に関しては人類学外部の多種多様な人々がどのように人類学を捉えているのかについて率直な意見が聞けたのが有意義だったのではないだろうか。1時間も続いた「場外バトル」で発言が絶えなかったことが、このバトルの盛り上がりを示していたように思う。

今回のバトルを個人的に顧みて、改善点があるとすれば、争点がより明確になるよう発表者間で事前に最低限の打ち合わせをしても良かったのではないかと感じた点だ。たしかに、筋書きが決められたプロレスとは異なり、自由に議論が発展していく点は面白いのだが、参加者からも指摘があった通り、賛成派・反対派の主張がそれぞれ独立し、交差していなかったように思える。特に今回は「誰にとって」人類学が役立つべきかを設定することで議論の方向性が大きく異なっていた。多忙な発表者にとって打ち合わせをするのは至難のことと推測されるが、どのような意味・枠組みで論題を捉えるかある程度の同意があった方が、対立がより前面に出てきて面白くなるのではないだろうか。とはいえ、議論が

意外な方向へと向かうからこそ人類学の面白味が出てくるという見方もできるので、これは一概には言えない。何はともあれ、時間が許す限り、今後も私はこの刺激的な人類学バトルに参加していきたい。

<編集部注>

この「第1回人類学バトル」は、日本文化人類学会関東地区研究懇談会の主催で、2006年10月7日に一橋大学東本館大教室において開催されました。